

『耳囊』の記事の中には、医者の治療や民間療法に関係のある話も混入している。記録されている人名の中に、医師の与住玄卓、秋山玄瑞、木村元長、斎藤友益、城芸(宗)英、阿部春沢、西良忠、その他に小児科医も鍼医も含まれているので、当時の医師の治療がうかがえる話もあり、鎮衛の耳に入った市井の民間療法の話もある。また健康にかかわりのある呪いの類もいろいろと書き残されている。そこで呪いの類も含めて、およそ医療、医薬に関係のある話を抽出し、その内容を、江戸時代の各種の民間療法の記録と比較しながら検討した。

関係があると思われる話は、重複しているものがあるが、全部で約99話あり、その中で医療と民間療法を合わせたものが68話、呪いを用いるものが31話あった。

例として『巻4』に含まれているものを、見だしを幾つかあげると、次のようである。

治療方に関するもの

◎耳へむしの入りし事、◎小児餅を咽へ詰めし妙法の事、◎眼の妙法の事、◎歯の妙薬の事、◎金瘡・灼傷の即薬の事、◎俄の乱心一薬即効之事
呪法

◎鼻血をとむる妙法の事、◎しやくり呪の事、◎咽へ骨を立手し時呪の事、◎痔の神と人の信仰可笑事、◎疝気まじないの事、◎痔疾まじないの事、◎雷を嫌ふもの薬の事

このほかに、処方にまつわる話もある。

◎実母散起立の事(巻1)、◎十千散起立の事(巻6)

『耳囊』の刊行本は、岩波文庫の旧版の2冊本(1939年初版)は6巻本であったが、現在の同文庫の『耳囊』は上中下の3冊本(1991年刊)で、これには新しく10巻本が収められている。また東洋文庫にも『耳袋』2冊本(1972年初版)があり、これも10巻本であるが、この刊本はページ数の関係から、呪いや民間療法的な記事は削除されている。そこで本研究では岩波文庫の3冊本を用いることにした。この底本になったものは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵の旧三井文庫本で、現在知られる諸本中唯一の10

巻完備の本である。

11) 群馬県沼田市の石仏と民間信仰について

On "Image of stone Buddha and Folklore at Numata city in Gunmma"

池園歯科研究会 ○湯浅 高之
藤野 珥男
日本歯科大学 屋代 正幸

Takayuki Yuasa & Yoshio Fujino, Ikezono
dental research group
Masayuki Yashiro, The Nippon Dental University

医学の発展をみない昔の人々は、病気の苦しみや歯の痛みの際に、どのような対応をしていたかを考えるのは、興味深いことである。

古来より、これらの時の対応の方法は、神仏に祈願するより他に仕方がなかったようで、各地の習俗や民間信仰の中に多く残っており、今なお伝承されている事例もある。

今回紹介する、群馬県沼田市内にある石仏は、地元の人たちから「味噌なめじいさん」、「味噌なめばあさん」と崇められ、古くから風邪や歯痛を治す霊験があると伝承されていて、人々は、風邪や歯痛になると味噌を持参し、石仏の口にこの味噌を塗りこみ、その快癒を一心に祈願すると治ると固く信じられてきている。

このような風習が他にないかと詮索してみると、いくつかの事例が認められた。そのひとつとして、「なで仏」といわれる仏像があり、「おびんずる様」と人口には膾炙されている。このびんずる尊者は、釈迦の弟子で、十六羅漢の筆頭といわれている。このため、この像は、各地の寺院に安置されていることが多い。日本ではいつの頃からか、自分の身体の痛んでいる所をなでて、その手でびんずる様の相当する所をなでると、病気が治ると信仰されてきている。また、東京都豊島区巢鴨の曹洞宗高岩寺は、「とげぬき地藏」の名で知名度が高いが、この寺の境内にも同様の石仏があ

る。通称「洗い観音」と呼ばれる石仏で、寺伝によるとこの石仏は、縁あって明治24年頃、他所より移築されたものとある。この石仏も、病を得ている人が、自分の病んでいる部分と対応する部分に水をかけてたわしで洗い、治癒を祈願すると快癒するといわれ、古くから信仰されてきている。

これらの他にもこのような習俗は、種々傳承されているものと思われるが、特に、石仏の口に味噌を塗るという習俗は、歯科医学的にも民族学的にも興味ある事例なので、実地踏査し、これに類似した習俗とを比較検討し、考察したので報告する。

12) バルベルデ人体構造解剖図説再考

Rethinking of Valverde's Human Anatomy

順天堂大学医学部医史学研究室

西大條文一

Bunichi Nishioeda

バルベルデ（ファン・ヴァルヴェルデ・デ・アムスコ）の名は、その「人体構造解剖図説（以下「図説」と略）」の扉絵が小田野直武らによって「解体新書」に模刻されたといわれていることから、本邦では「ワルエルダ」として周知ではあるが、その生涯については不詳な点が多く、最大の業績である当の解剖書についても評価が定まっているとはいえない。ここでは当書のもつ獨創性、特異性に焦点をあてて考察してみたい。

従来バルベルデの主著である「図説」は、16—17世紀をつうじてのベストセラーでありつづけたにもかかわらず、アンドレアス・ヴェサリウスの先行書「人体解剖学（以下「ファブリカ」と略）」の拙劣な剽竊であるとして不当にその価値が貶められていたように思われる。ヴェサリウス自身も「バルベルデは解剖に指1本触れたこともなく、医学のイの字も知らぬくせに、恥ずべき利益のためにのみ我々の芸術のスペイン語訳を企てたのだ」等とくちをきわめて罵っているが、同処に「彼の師のコロンボが表面的にさえないえなかったガレヌスの記述を多くの点で覆している」とも

記しており、当時は図版などのモチーフの流用やパロディは一般に許容されていたことや、現に同時期のアンブロワズ・パレの模刻に関してはヴェザリウスが隻句も発していないことなどからみて、彼のアンビヴァレントな発言は「コピー」が「オリジナル」をある面で凌駕してしまったことに対するやり場のないいらだちの表れでしかないように思える。

バルベルデ「図説」の獨創性の第一は、版型が縮小され、又7巻の大著「ファブリカ」が1巻に纏められたことにより携帯が容易になった点で、袖珍の解剖実用書として広く普及した主要原因と考えられる。筆者蔵のイタリア語版（1560年）にも人脂によるとおぼしき頁のめくり跡が散見せられ、この2書はあたかも近代におけるゾボッタ解剖学書とクレメンテのアトラスの関係に比せられよう。

第二に、1556年の初版からスペイン語を採り、次いでイタリア語版、ラテン語版が1568年に至って反訳され、1568年にはオランダ語版がでていう点であり、あくまでラテン語中心のアカデミズムの（汎ヨーロッパ主義でもあるのだが）に先駆すること甚だしい。

第三に、各論解説を別章に立て、ヴェサリウスの「ファブリカ」では何頁にもまたがっていた図版を右側一葉に一括して印刷し、左頁に各部位の呼称と短い解説を付し、さらに記号の欄をもうけて対照索引を簡便にしたことである。これに伴い1頁内の部分図の配置も簡素でかつむだのない独特の様式を持つに至った。この劃期的な方法はアンシクロペディストの時代をへてなお現代のフェナイス解剖学辞典にまで踏襲されている。

第四に、図の芸術性の優劣がよく云々されてきたが、ガスパール・ベチェッラによる「図説」の銅版画は、シェーマとしての明晰さと描線の克明さを増し「ファブリカ」のそれに劣っているとはいえない。むしろ描写の一般化（普遍化）という点において特定の遺体のクロッキーといった術学的趣きを排したところに進歩が認められる。それは背景の自然が必要最小限にまで割愛されていることによっても容易に知られよう。